

KUSAYAMA
SHADATANE

草山貞胤

～ 明治維新一五〇年 明治神道人の足跡 ～

幕末から明治維新を経て、日本が近代国家へと成熟する中、当時の日本社会は鎖国が解かれ欧米より様々な文化風習が入り、日本の伝統文化が入り乱れる明治激動の変革期でもあった。当時、古典でもあった古事記・万葉集等を研究すること、古代日本の思想・文化から日本人の心の在り方を示した明治の神道家に焦点をあてて、知られざる活躍に今一度注目致したく、明治維新一五〇年のこの機会に当世の神奈川の神道人について論説したい。

明治時代の神道

国学の四大人とも数えられる平田篤胤【ひらたあつたね】は、天地開闢論、産霊観念、幽真信仰など独自の解釈から、平田神道ともいわれる独自の神学体系を作りあげた。のちに平田学派は地方の豪農層・神官らに広まり、民衆に大きな影響を与えた。

福住正兄を仰ぐ

はじめに平田篤胤の没後門人でもある福住正兄【ふくずみまさこ】(平塚出身)を紹介したい。

草山貞胤【くさやまきただたね】は、生涯を通じて同郷の福住正兄を師であり、兄として仰いだ。

正兄は二宮尊徳(小田原出身)の弟子で、富田高慶、斎藤高行、岡田良一郎とともに「尊徳門下

の四高弟」のひとりといわれた。神奈川県平塚市片岡にて大澤家の五男として生まれ、幼いころから儒学、和歌、国学を修め十三歳で四書五経の素読を完了したという。二十一歳のとき医師を志すが、その気持ちを父・市左衛門に告げたとこ「国の病を治す医者となるがよい、そのためには尊徳先生のもとで実地に修行したらどうか」とすすめられて、弘化二年(一八四五)尊徳門下生になった。以後五年にわたり尊徳の身辺の世話をしなから「報徳仕法」を学んだ。嘉永三年(一八五〇)その門を辞し、家運が傾いていた箱根湯本の旅館・福住の婿養子となり、九歳(福住正兄)と改名し(こ)で師尊徳の教えを実践すべく旅館の再建に乗り出す。尊徳の思想の柱は、「誠実勤勉に働いて収入を増やし(至誠、勤勞)、収入に心じて支出に限度を設け(分度)、余裕を生みだし、その蓄えた余裕を次世代や地域のために譲っていく(推譲)」というもので、既存の国学の枠にとどまらない道徳と経済観念をそなえた実践的な教えであった。福住は報徳の実践をもって箱根の温泉旅館の発展に努め、湯本村の振興に尽力した。明治維新後、福住は箱根の地域振興のため土木事業などの公共事業に積極的に取り組み、

明治十五年(一八八二)小田原へ箱根湯本間に近代的な道路を設置し、馬車、人力車の往来が可能となる日本初となる有料道路を竣工した。また、明治二十年(一八八七)には、国府津へ箱根湯本の馬車鉄道の敷設、さらに電信機や電灯発電の導入にも尽力した。明治二十五年(一八九二)には関東地方最初の水力発電所が完成し、文明の灯を旅館街に灯した。福住のこうした努力によって、全国屈指の観光地となる箱根の礎を築いたといえる。「箱根開発の父」「箱根近代化の父」ともいわれる。功績で、報徳の教えの実践をもって箱根開発とともに生きた生涯であった。

秦野たばこの祖

福住正兄の遺訓を継いだのが農政家神道家、草山貞胤(秦野出身)である。貞胤は、文政六年(一八二二)に相模国大住郡平沢村(現・秦野市平沢)に出生した。草山家は、鎌倉時代より代々産土の御嶽蔵王社【みだけざおうしゃ】(現在の御嶽神社【みだけじんじゃ】)の社家であった。当時、近隣の寺子屋でもあり、幼少の頃から父に習って習字や素読を学んだ。後に、慶応三年(一八六七)に小田原藩士・吉岡信之に国学を学ぶために小田原へ赴き、さらに明治六年(一八七三)貞胤五十歳

の頃に二宮尊徳の一番弟子である福住に報徳仕法を学んでいる。

貞胤は安政五年(一八五八)、三十六歳の時に神祇伯白川殿より跡目許状を受け御嶽神社の祠職を継ぎ、十九社の神社を兼務したという。その中に片岡神社(平塚)があった。正兄が片岡神社の氏子であったことから縁故を得て、貞胤は正兄からその教えを学び、最も信頼の厚い門下生の一人となった。

秦野は、古くから「はだの煙草」「相模たばこ」の産地として名を馳せていたが、当時は耕作主たちが各々栽培法を秘伝にしていた為、品質に差異が生じていた。貞胤は神職の傍らその格差をなくす為、秦野煙草の改良に専念し、自ら正条密植法・秦野式改良苗床・水車によるたばこ刻み器の発明などを研究、その成果を耕作主に伝授して品質の安定を図り、秦野煙草を確立させ、「秦野煙草の祖」と謳われるようになった。

明治五年頃になると秦野たばこは鹿児島県国分の国分葉、茨城県久慈の水府葉と肩を並べ全国三大銘葉とも知れ渡り、「国分(鹿児島県)たばこは氣候で、水府(茨城県)たばこは土壌で、秦野たばこは技術でもつ」として全国の愛煙家に高く評価された。

秦野地方は宝永年間の富士山の大噴火により蓄積した火山灰の影響で、稲作や農作に適さない荒れた土壌にも拘らず、耕作者が一丸となり煙草栽培・製作の為、努力と改良を重ね、全国に認められるまでに至った。

報徳二宮神社の創建

高い技術に裏打ちされたその栽培方法は全国的にも広まり、貞胤はじめその門下生が埼玉、愛知、東は福島から西は島根まで諸県をまわって秦野式煙草栽培法を指導するようになった。

また、いち早く環境問題に着目し、各地で植樹活動などを行ったとされる。当時、商品作物としての煙草の価値は非常に高く、国家管理のもと専売公社によって経営され莫大な富を生み出したという。貞胤は煙草がまだ自由市場であった時に様々な改革を考案し、煙草生産全体にわたって先駆的な役割を果たしたと言える。明治十五年には全国農談会にて農業技術の改良発展を図る全国組織「大日本農会」が発足され、貞胤は大日本農談会員を委託された。この

当時からのちに内務大臣になる品川弥二郎などの農商務省官吏とも関わりをもつようになったとされる。この時、元老員で出雲大社教管長でもある千家尊福との縁を得た貞胤は、出雲大社教の教えを受け、明治二十一年「出雲大社相模分院」を創立した。

正兄から報徳の教えを学んでいた貞胤にとって、祖先を大切にす報徳の教えと、尊福の幽真信仰を提唱する大社教の教えとは究めて親和性が高かったと思われる。

明治二十四年、貞胤は正兄とともに尊徳を祀る神社の創建に乗り出した。当時の国家神道の体制では個人が没後に人霊として神社で奉られるという思想は必ずしも一般的なものと見えなかった。貞胤は煙草開発などで得た私財を投じながら各報徳社の協力を仰ぎ神社建設に向けて奔走した。

その結果、明治二十七年、小田原城内に報徳二宮神社を創建、志なかねで帰幽した中心人物の福住正兄の遺言に従い、貞胤は報徳二宮神社初代社掌に就任した。

貞胤の儉素質直の人柄は人々の敬仰する所となり、後年、大日本農会会頭小松宮彰仁親王より緑白綬有功章・明治天皇裁可のもと賞勲局より緑綬褒章を下賜された。晩年にわたり生涯報徳の教えを忠実に実践していたが、明治三十八年八十三歳にてその生涯を閉じた。

現在、秦野地方の煙草栽培は衰退し、国策により昭和五十九年をもって

煙草耕作はやむなく終焉を迎えた。秦野の里山をうめつくした煙草畑も消え、秦野たばこは技術でもったとの誇り、その想いは毎年秋に市民をあげて盛大に開催される「秦野たばこ祭り」にその名を残すだけとなった。

幕末明治という激動の時代を勤勉な人柄をもって生き、報徳の教え、大社教の教えをもって農政改革を実践し、社会に貢献し続けた貞胤の生き方は高く評価され、福住正兄とともに神奈川県史上活躍した「かながわの100人」にも選ばれている。生家である秦野の故郷には、今も変わらず御嶽神社、出雲大社相模分祠が祀られ、その教えを実践し信仰を絶やすこととはない。

※本論考は『神社新報』(平成三十年十一月発行)に寄稿したものを加筆修正したものである。

御嶽神社社掌
出雲大社相模分祠副長
草山和泉



▼出雲大社相模分祠境内に建つ「社家十五代 草山貞胤銅像」